

平成29年11月13日(月)

老球の細道370号

## 「11月11日」母の命日に亡き母を想う

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「父は打つ 母は抱きて 悲しめば 違う心と 子や思うらん」

子どものために思って子どもを打つ父親の厳しい愛も、かわいそうにとその子どもを抱きしめて慰める母親のやさしい愛も、愛にかわりはないという歌である。古今東西、「馬鹿者！」と叱りつける父に対して、それを後へまわってフォローしてくれるのが母というのが世の常である。しかし、私の亡くなった母に関しては、そのような思い出は一切ない。父以上に私を叱り、私に反抗されればされるほど、ますます闘志を燃やして怒り狂うのが若かりし頃の母の姿であった。酒もタバコもOK（父は反対のNO）。家には毎晩のように近所の人たちが集まっていた。親分肌の母を慕いお茶のみ話をするためである。

母のやさしさに飢えていた子どもの頃、友人達のやさしいお母さんたちをなんとなくうらやましく思ったことか。なんて自分は不幸の星の下に生まれてきたのだらうと「マッチ売りの少年」になってしまうこともたびたびだった。

昔はとにかく母とぶつかった。毎日顔をあわせるたびにケンカした。だから、なるべく家にいないように心がけた。居場所は体育館と映画館。おかげでシュートはうまくなり映画も趣味となった。人生は何が幸、不幸になるかわからないものである。思えば母の小言、母の叱責から開放される日をどれほど待ち望んだことか。大学に進学して会津から離れた日々は自由開放の天国であったことを思い出す。

人は自らが子の親となってわが親の恩を知るようになる。私もしかり。

「若い日あなたに死ねと言った。あの日の私を殺したい」

『日本一短い母への手紙』という本の中にある一編である。母は老いてから、大病を何度も患った父の看病ですっかりやせてしまった。健康だった母が、今度は自分が胃潰瘍、糖尿病、高血圧、狭心症としだいに容体を悪化させていった。そんな弱々しい母の姿を見るようになってから、若かりし頃の浅はかな言動を後悔するようになる。何十年かかったのだらう。ようやく母は私にとって鬼母から慈母へと変身した。

亡くなる前の年、母は突然坂下高校まで友人の車でやって来た。対応した事務室の方々が「変なお婆ちゃんが先生の名前を言っている」と知らせに来た。母であった。職場を見たかったという。その後、今度は私のバスケットボール講習会を見学に来た。終わってから言ったコメントが「お前は多くの人前で話すことができるんだ！」であった。母は私のバスケットボール関連の行動を見たことがなかったから、多勢の前で講師を務めているわが息子の雨姿(?)を見てびっくりしたらしい。母にとって私は悪ガキのままだった。

亡くなる前日電話をした、インフルエンザが流行しそうなので「母ちゃん、気をつけるよ！」が最後の会話になった。翌日コタツを準備しているときに急性心筋梗塞になり病院へ。私が駆けつけたときはすでに意識不明の状態。ある詩を思い出して奇跡を待った。

「おふくろ 死ぬなよ。いいと言うまで死ぬなよ。親孝行が全部終わるまで死ぬなよ」

「諸人よ 思い知れかし 己(おの)が身の 誕生の日は 母苦難の日」

「母ちゃん、ありがとう」の言葉を伝えず死なせてしまったことを今でも悔いが残る。

11月11日は母の8回目の命日であった。何でも「1番になれ」ということか？